

まえがき

—シンポジウム「文化遺産としての幕末蝦夷地陣屋・囲郭の景観復原」—

Preface for the Symposium

“Reconstruction of Landscape around Military Camps Made in Ezo Province about the Half of Nineteenth Century as Cultural Heritage”

戸祭 由美夫¹

Yumio TOMATSURI¹

要旨

今回のシンポジウムの発表は、平成22～25年度科学研究費補助金（基盤研究B, 研究代表者：戸祭由美夫, 課題番号：22320170）による共同研究「文化遺産としての幕末蝦夷地陣屋・囲郭の景観復原—GIS・3次元画像ソフトの活用」の研究成果であり、幕末蝦夷地の陣屋などの防衛軍事施設を対象とし、歴史地理学的・古地図学的な成果を基礎に、文化遺産の保存修景や自然環境からの分析も含め、GISの手法やCADなどの画像ソフトを用いて、当時の景観を総合的に復原・視覚化した成果である。

キーワード：幕末蝦夷地、陣屋・囲郭、歴史地理学、景観復原、文化遺産

Key words：Military camps (Jin'ya), Ezo Province, historical geography, reconstruction of landscape, cultural heritage

I. 今回の共同研究にいたる経緯

今回の共同研究の研究代表をつとめる戸祭由美夫は、近世の日本各地に分布する城郭・囲郭の中で、幕末の箱館に建設された五稜郭が西洋式の稜堡をもつ特異な星形囲郭をなすことに注目して、日欧囲郭の比較歴史地誌研究に進んでいった¹⁾。その過程で、平成17～20年度の科学研究費補助金（基盤研究B, 課題番号：17320132）を得て、共同研究「北海道・東北各地所蔵の幕末蝦夷地陣屋・囲郭に関する絵地図の調査・研究」を組織し、以下のような研究成果を挙げることができた。

すなわち、北海道・東北地方各地の12機関（函館市中央図書館・弘前市立弘前図書館・弘前市立博物館・八戸市立図書館・十和田市立新渡戸記念館・盛岡市中央公民館・宮城県図書館・秋田県公文書館・財団法人致道博物館・鶴岡市立図書館・会津若松市立会津図書館・東北大学附属図書館）に所蔵されている幕末蝦夷地関係の絵図を調査し、その所蔵絵図の一覧表を作成するとともに、調査に基づく検討成果を7本の論文にまとめて研究成果報告書に収録した（戸祭, 2009）²⁾。

このような研究成果を得た平成17～20年度の共同研究の特徴としては、以下の3点にまとめられ、一言で言えば、地味な基礎研究であったといえよう。

①古地図学的な基礎研究…研究課題に沿った基礎作業として、絵図・古地図を網羅的に閲覧し、リストを

作成したこと

- ②歴史地理学的な基礎研究…収集した絵図データに基づいて、陣屋・囲郭の建設プランやそれらの位置・規模の比定や幕末以降の変遷を明らかにしたこと
- ③地図作製史上の基礎研究…古地図・絵図に関する作製の経緯や作製者・作製主体などを明らかにしたこと

II. 今回の共同研究の特徴

今回の共同研究「文化遺産としての幕末蝦夷地陣屋・囲郭の景観復原—GIS・3次元画像ソフトの活用」は、前回の上述のような共同研究の成果と特徴を踏まえて、平成22～25年度科学研究費補助金（基盤研究B, 研究代表者：戸祭由美夫, 課題番号：22320170）を得て、次のような特徴をもたせたものとした。

第一に、主たる対象とする陣屋・囲郭を絞ることとし、その際の選別の指標として、(a)当時の建設プランや建物の間取りを示す絵図が残されていることと、(b)跡地が国史跡などとして整備されていることの2点を重視した。その結果、①箱館の東北諸藩の各元陣屋、及び②盛岡藩の噴火湾岸の蝦夷地陣屋・囲郭を主な対象とすることとなり、③それ以外の他の東北諸藩の陣屋・囲郭も随時検討対象とすることとなった。

第二に、次の2つの新たな研究視角を導入することにした。

¹ 奈良女子大学 名誉教授／Professor Emeritus, Nara Women's University, Japan

①陣屋・囲郭の立地条件を自然環境面（地形・気候）から分析するために自然地理学的な研究視角を導入することにし、a) 地形学の視点から、衛星画像および空中写真の三次元表現を活用して、陣屋・囲郭の立地条件について解釈・分析をおこなうことと、b) 気候学の視点から、各種の気象統計を活用して、19世紀の冬季の北西季節風の影響や森林火災の危険性など、マクロな気候分析をするとともに、個別の陣屋・囲郭に関する古気候データに基づくミクロな分析もおこなうことにした。

②蝦夷地の陣屋・囲郭を幕末の全国的視野から特徴を把握するために、歴史地理学の視点から、a) 近世日本各地の陣屋・囲郭、特に東北地方の陣屋と比較すること、b) 幕末に日本の沿岸各地で建設された台場と比較すること、c) 第1次幕領期の蝦夷地陣屋・囲郭と比較することの3点を新たに加えた。

第三に、新たなデータ分析・提示手法として、次の二つを導入することとした。

①歴史 GIS 手法に基づいて、陣屋・囲郭の位置・形態を復元するというもので、地理学研究で重要な手法となっている GIS の手法を導入し、デジタル化された絵図の画像情報を活用して、数値情報とマッチングさせることで、陣屋・囲郭の位置・形態を現在の地図上に厳密に復元する。

②建築史・保存修景の手法を導入し、CAD などの3次元画像ソフトを利用して陣屋・囲郭を立体的画像で復元するというもので、文化遺産として貴重な伝統家屋・集落や遺跡の平面図・立面図の作製で成果を挙げてきた建築史あるいは保存修景の手法を活用して、絵地図に描かれた幕末の蝦夷地陣屋・囲郭を、CAD など3次元画像ソフトの利用によりカラー立体画像で復元する。

Ⅲ. 研究成果公表と本シンポジウムの意義

以上のような今回の共同研究は、すでに平成 22～24 年度末に奈良女子大学で研究成果の発表会と討議を行ってきた。そして、神戸大学鶴甲第 1 キャンパスで開催の 2012 年日本地理学会秋季学術大会において、「幕末蝦夷地陣屋の景観復原に向けて」というシンポジウム (S11, オーガナイザー: 戸祭 由美夫) を行い (10 月 7 日)、共同研究メンバーによる 6 件の発表を行った³⁾。このシンポジウム発表は、それまでの担当テーマに関する中間的な研究成果を学会の場で公表することを目的としたもので、3 名のコメンテーターをはじめ、参加者からご意見をうかがうことができた。

今回の北海道地理学会のシンポジウム発表は、それら従前の発表をも踏まえた最終的な成果発表である。平井論文は、データ分析・提示手法として今回導入した歴史 GIS 手法に基づき、陣屋の位置・形態の復元を試みたものである。平川・澤柿の論文は、新たな研究視角として導入した地形学の視点から陣屋の立地条件を分析したものである。木村ほかの論文は、同じく新たな研究視角として導入した気候学の視点から陣屋

の立地条件を分析したもので、財城ほかの論文は、新たな古気候資料をもとに、幕末の箱館に焦点を当てた分析である。土平論文は、新たな研究視角として全国的視野から蝦夷地の陣屋の特徴を明らかにしたものである。なお、同じく全国的視野から幕末日本の沿岸各地で建設された台場のと比較は戸祭の担当であったが、シンポジウム全体に与えられた時間的制約や絵図資料のネット公開上の制約などから、その成果は科研報告書の中で公表することにした。

本科研共同研究の成果は、今回の『地理学論集』掲載論文を中心としつつ、より豊富なカラー絵図資料を盛り込んで年内に刊行する予定である。なお、すでに本研究の基礎資料の一つとして、盛岡藩が安政 2 (1855) 年に蝦夷地持場見分に派遣したメンバーの中の次席責任者たる新渡戸十次郎による詳細な見分記録『松前持場見分帳』が、共同研究メンバーの村上由佳氏により翻刻されて、本科研報告書 (その 1) として刊行されている (村上, 2012) ことを申し添えておきたい。

謝辞

平成 25 年度北海道地理学会春季大会において、その午後の時間を本シンポジウム開催に充てて下さり、その発表内容を『地理学論集』の特集として掲載させていただくことにご配慮いただいた北海道地理学会幹事会メンバー各位や会場校の北海学園大学及び共催の札幌地理サークルの関係者、とりわけ高橋伸幸・橋本雄一・渡辺梯二・金森正郎の諸先生に厚く御礼申し上げます。また、本科研の共同研究メンバーであり、北海道地理学会の幹事でもいらっしゃる木村圭司氏には、長期間にわたって折衝の労をとっていただいたことに心より感謝いたします。

付言

なお、当初はこの報告書に掲載を予定されながら、執筆予定者の都合で残念ながら掲載に至らなかった研究発表もあることを付言しておきたい。

注

- 1) 戸祭 (2009) の科研報告書に収録していない論考は戸祭 (1997, 1998a, 1998b, 2000, 2002, 2010) および Tomatsuri (2006) である。
- 2) 戸祭 (2009) は 190 頁で、Ⅰ. 総論 (1-8 頁)、Ⅱ. 各論 (9 - 139 頁)、Ⅲ. 絵図一覧 (141 - 169 頁)、Ⅳ. カラー図版 (171 - 190 頁) から構成されている。このうち各論に収録の 7 篇は、戸祭ほか (2009a) の再録のほか、戸祭ほか (2009b)、出田 (2009)、平井 (2009)、小野寺 (2009)、米家 (2009)、村上・中尾 (2009) の新稿である。
- 3) 発表は以下の通りで、各メンバーの担当テーマをタイトルとしているので、今回の発表とタイトルはほぼ同じである。
(*: 口頭発表者)
平井 松午: GIS を用いた幕末期における蝦夷地陣屋の 3D 復元
平川 一臣*・澤柿 教伸: 幕末蝦夷地陣屋の立地環境—その地形学的検討—

木村 圭司*ほか:幕末蝦夷地陣屋の立地環境—その気候学的検討

財城 真寿美*ほか:幕末箱館の古気候復元

増井 正哉:幕末蝦夷地陣屋の建造物復元の試みと課題—その建築史からの検討—

土平 博:蝦夷地陣屋の構築物と近世陣屋の形態変容

なお、その発表要旨は、E-journal GEO, 7 (2012) 268 - 274 にシンポジウム記事として掲載されている (2013年1月31日公開)。

文献

- 出田和久 (2009) :九州諸藩における蝦夷地関連絵図の所蔵状況—松前城下絵図を中心に—, 戸祭 (2009) 科研報告書に収録.
- 小野寺 淳 (2009) :安政2年における盛岡藩の蝦夷地警衛と絵図作製—長澤盛至とその作製絵図について—, 戸祭 (2009) 科研報告書に収録.
- 米家 (山田) 志乃布 (2009) :秋田県公文書館所蔵「マシケ御陣屋御任地面境内略図」の作製主体と作製年代について, 戸祭 (2009) 科研報告書に収録.
- 戸祭由美夫 (1997) :オランダの囲郭都市プランとその変容に関する予察 (前篇), 人間文化研究科年報 (奈良女子大学), 12, 163 - 176.
- 戸祭由美夫 (1998a) :オランダの囲郭都市プランとその変容に関する予察 (後篇), 人間文化研究科年報 (奈良女子大学), 13, 169 - 186.
- 戸祭由美夫 (1998b) :ベルギーの囲郭都市プランとその変容に関する予察, 地誌研年報 (広島大学総合地誌研究資料センター), 7, 87 - 120.
- 戸祭由美夫 (2000) :幕末に建設された北海道の囲郭, 足利健亮先生追悼論文集編纂委員会編:『地図と歴史空間』大明堂, 131 - 153.
- 戸祭由美夫 (2002) :箱館奉行所方形囲郭に関する近代以降の跡地利用, 歴史地理学, 44, 60 - 72.
- 戸祭由美夫 (2009) :『北海道・東北各地所蔵の幕末蝦夷地陣屋・囲郭に関する絵地図の調査・研究』(平成17 - 20年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)), 課題番号 17320132) 研究成果報告書.
- 戸祭由美夫 (2010) :古地図などからみたヨーロッパ諸都市の変容, 古地図文化ぎふ, 10, 14 - 28.
- 戸祭由美夫・出田和久・平井松午・小野寺 淳・中西和子 (2009a) :十和田市立新渡戸記念館所蔵の幕末蝦夷地関係絵図の書誌的検討, 歴史地理学, 51, 37 - 53.
- 戸祭由美夫・出田和久・平井松午・小野寺 淳・中尾千明 (2009b) :弘前市立弘前図書館所蔵の幕末絵図にみる弘前藩箱館千代ヶ台陣屋の建設プランとその変化, 戸祭 (2009) 科研報告書に収録.
- 平井松午 (2009) :幕末期における箱館近在五稜郭および陣屋の位置に関する GIS 手法を用いた検討, 戸祭 (2009) 科研報告書に収録.
- 村上由佳 (2012) :『十和田市立新渡戸記念館所蔵 新渡戸十次郎筆『松前持場見分帳』の翻刻』(平成22 - 25年度科研費研究成果報告 (その1) (課題番号 22320170)), 奈良女子大学.
- 村上由佳・中尾千明 (2009) :安政2年における盛岡藩の蝦夷地持場の見分に関する予察—「松前持場見分帳 (十和田市立新渡戸記念館所蔵新渡戸家文書)」の分析から—, 戸祭 (2009) 科研報告書に収録.
- Tomatsuri, Y. (2006) : The meeting of western and oriental cultures: Military architecture in the 19th century, southwestern Hokkaido, Japan, 地誌研年報 (広島大学総合地誌研究資料センター), 15, 103 - 122.